

□12月7日説教(隅野徹牧師)短縮版
「キリストこそわたしたちの太陽」(詩編19:1～15)

今回の中心箇所は5節の後半から7節を挙げさせていただきます。7節に「その熱からだれも逃れられない」とあるように、近づきすぎたり、光と熱を浴び続けることができないのが太陽です。その太陽を熱と力を放つものとして、神が創造されたのです。一方でまるで幕屋が設けられるようにして、さえぎられる時もお造りになりました。だからこそ、地球上の生物は生きていくことが出来るのです。昼と夜があり、夏と冬があります。そして神は太陽が天の果てを目指して回っているかのように、天体たちを規則正しく回しておられるのです。

旧約時代の信仰者たちは太陽そのものを崇拝するのではなく、太陽をかたち造り、その動きに法則性を持たせておられる、全能の神をこそ信仰したのです。その後新約の時代となり、世を照らす光としてキリストが来られました。信仰者たちは旧約聖書に幾たびも出てくる、創造主である唯一の神が太陽を造られたという信仰を引き継ぎつつも、新たにとらえ直しました。だからこそ冬至に太陽を拝むのではなく、本当の意味でわたしたちの心を温かくさせ、きよめてくださるキリストが、この世に来てくださったことを覚えることを大切にしました。

クリスマスには、独り子をお与えになるほどに神はわたしたち一人ひとりを愛しておられる、というあたたかな愛が、わたしたち人間に示されています。その神のあたたかい愛を直接示して下さったのが、太陽のようなお方としてわたしたちを救うために、この世に来てくださった神の子イエス・キリストなのです。
(終)